

「平成 21 年度 第 3 回真名川ダム弾力的管理検討委員会」 議事概要

○日時：平成 22 年 2 月 18 日（木）14 時～16 時

○場所：多田記念大野有終会館 1 階 106 号室

○議事内容

1. フラッシュ放流試験の実施内容

2. 調査計画

について事務局から説明

主な質疑応答、意見の内容は、以下のとおりである。

■フラッシュ放流試験の実施内容について

(委員)

- ・過去 10 ヶ年の 4 月 14 日の五条方地点の流量は最も多い年では 30～36m³/s となっているが、今回のフラッシュ放流量はこれらの流量にプラスされるという理解でよいか？

(事務局)

- ・五条方地点が 15m³/s 程度までの流量となっている場合は発電放流だけだが、過去 10 ヶ年のうち流量が多い 2 ヶ年は融雪に伴うゲート放流を行っていたと思われる。このような場合に、その放流量に 70m³/s をプラスしてフラッシュ放流量とするのか、または、その放流量を含めて 70m³/s とするのかは、まだ決めかねている。今年は雪が多かったため、場合によっては過去 10 ヶ年の中では大きかった 30m³/s などよりもっと大きな流量となっている可能性もある。そのような場合には事前の調査や置き土ができないかもしれないので、フラッシュ放流試験の中止もあり得ることになる。
- ・現時点では 2 ヶ月先の状況ははっきりしないので、状況を見極めながら、また関係機関と情報交換しながら、調整したい。

(委員)

- ・河川工事や道路（橋梁）工事を実施している可能性があり、フラッシュ放流によって工事に影響が出ないように配慮願いたい。

(委員)

- ・最大流量が直前まで定まらないと調査員の安全面や調査実施上、支障が出る可能性もある。プラス 70m³/s ではなく、70m³/s 放流を上限とすることを基本として計画を進めていけばよいと思われる。

(委員)

- ・4 月はアマゴやサクラマス釣りで県外からの客も多いと聞いているが、漁協を通じてフラッシュ放流実施の周知をする必要はないか？

(事務局)

・漁協との打ち合わせの際にはそのような周知が必要との話は無かった。

(委員)

・フラッシュ放流当日、下荒井堰堤へ増水や濁りについて問い合わせが来る可能性があるが、真名川ダムでフラッシュ放流を行っているとは回答しても良いか？

(事務局)

・事前に記者発表も行う予定であり、回答してもらって構わない。

(委員)

・70m³/s 放流をすると下流の水位はどの程度上昇するのか？

(事務局)

・場所によって異なるが、真名川では1m位、鳴鹿大堰下流では恐らく20cm位と思われる。

(委員)

・フラッシュ放流時に真名川頭首工のゲート操作が必要か？

(委員)

・真名川頭首工の操作はフラッシュ放流の調査や調査結果の評価に影響する可能性があるため、なるべく人為的操作をしない方が調査上は望ましい。

(事務局)

・提案させていただいたフラッシュ放流の波形では真名川頭首工の操作に支障が出るということであれば調整させていただくので、施設管理者の方で検討願いたい。

■調査計画について

(委員)

・前はフラッシュ放流に伴う地下水位の変化を一部計測出来なかったが、今回は計測できるという理解でよいか？ フラッシュ放流時は地下水位が高い時期か？

(事務局)

・地下水位データは継続的に計測できている。地下水位は冬に一番低くなり、今上昇していきつつあるところで、フラッシュ放流時も上昇していく途中の時期になると思われる。

(委員)

・平成20年の自然再生試験の場所は河川改修工事で地形が変わってしまったが、県から最新の横断データをもらい、代表断面でフラッシュ放流時に水深や水面幅がどうなるかを算定しておいた方がいい。

(委員)

・水深計測は河川の中に入って実施するのか？

(事務局)

・フラッシュ放流前は河川の中に入って計測するが、フラッシュ放流中は水の中には入

らずに（河岸の水面位置を）計測する。

（委員）

- ・今回の造成ワンドにおいて、フラッシュ放流直後に底生動物調査を実施すれば、ワンドに流れ込む動物(流下昆虫)を把握することができるので、実施して欲しい。これまでの調査では、底生動物がもともとその場所に生息していたのか、フラッシュ放流により流れてきたものか把握することができなかった。

（事務局）

- ・費用の問題もあるが、検討したい。

（委員）

- ・淵の調査はフラッシュ放流前後で実施するとともに、地形計測は面的に実施してほしい。
- ・トータルステーションとは何か？
- ・淵の河床材料を粒度分析までしなくても写真撮影だけでも判るのではないか？
- ・60cm のコドラートにする根拠は何か？

（事務局）

- ・地形測量は5測線ずつ測量を行う予定。
- ・トータルステーションはレベルやトランシット等が一体となった測量機器。
- ・河床材料の写真撮影だけでは定量的な評価ができないと考えている。
- ・コドラートの設定については現時点では手探りであり、いい方法があればご教示願いたい。

（委員）

- ・調査する淵は置土箇所からどの程度下流に位置するのか？

（事務局）

- ・概ね 5km 程度下流である。

（委員）

- ・平成 20 年の置土で残っているものから粗い礫をとることはできるか？

（事務局）

- ・スケルトンで除去することは考えられるが、今回の調査では予算的に実施が難しい。

（委員）

- ・置土の直ぐ下流側は地形が高くなっているため、置土の下流端付近は流れが止まるような流況になり、土砂が移動しない可能性がある。もっと置土を河川側に集めて、裏側にも水が流れるように出来ないか？

（事務局）

- ・置土の置き方は工夫してみる。

■その他

(事務局)

- ・次の委員会はフラッシュ放流試験の結果を報告する場として、5月に実施する予定である。

以上